

《第 538 回(2026 年 9 月 10 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:9 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ホビットの冒険』 J.R.R.トールキン/作, 瀬田 貞二/訳, 寺島 竜一/絵 岩波書店

9 月は、『ホビットの冒険』を読みました。引込み思案で気のいいホビット小人のビルボ・バギンズが、ある日、魔法使いガンダルフと 13 人のドワーフ小人に誘いだされて、竜に奪われた宝を取り返すために旅立つ冒険物語です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●映画「ロード・オブ・ザ・リング」の宣伝が盛んにおこなわれていた時期に、前日譚である今作を読んだことを記憶している。冒頭の「ホビットはお客好き」という一節に、高知で言う「おきゃく文化」に通じるものを感じた。読んでいて、スマウグやゴブリンにも彼らなりの言い分があるんじゃないかと思った。

●24 年前に読んだ。『ホビットの冒険』はビルボの成長の物語。今作で指輪を拾い、『指輪物語』でその指輪を捨てる。著者は子ども向けに『ホビットの冒険』、大人向けに『指輪物語』が書いたそうだと。宝物を前にしたら、こんなに人が変わるんだ」「1 人では難しいこともみんなで集まれば、世界を変える力になる」と感じた。

●日本版の『ホビットの冒険』の寺島氏の挿絵を見ると、トールキン氏自筆の挿絵をよく参考にしていることが分かる。ツグミが最後の宝を見つける手助けをするのを見て、小鳥の導きがあるのはイギリス文学らしいと感じた。最後の場面のサクビル一家とのやり取りは、これまでの冒険とは違うオチでユーモアを感じた。『指輪物語』追補編の年表を読み、本当はホビットだったはずのゴクリは、どうしてこの姿に変わってしまったのかと考えさせられた。

●ビルボは怖がりで普通の人だが、血筋によって冒険の道に進むことになる。大変なことはいっぱいあるが、結局は人間性の良さが大事だ。著者が自分の 4 人の子どもに『ホビットの冒険』の原型となる話を語って聞かせたことを知り、この作品には彼の親としての思いが込められていると感じた。

●ビルボが選ばれた理由、ドワーフとホビットの種族の違いが気になった。ゴクリとの

なぞなぞ対決が面白くて、この場面は 3 回読んだ。地の文で主人公の名称が「ビルボ・バギンズ」「ホビット」の 3 種類あるが、その違いは何だろうか。全体の感想として、この長さは読みにくと感じた。子どもたちにも読んで欲しいが、どうやって手渡していくかが課題だろう。

●人の名前や種族がたくさん出てくるのが難しかった。旅の道のりを地図を見ながら読んだので、時間がかかった。この作品が映像になると、また違った面白さがあるだろうと思った。

●アメリカ文学は開拓の歴史から、「人間」と「動物・自然」の対比が描かれることが多い。イギリス文学では富裕層が作家となり、「ここではない世界」を描いたファンタジー作品が多く生み出された。保守的なバギンズ家の父と野生的なトック家の母を持つ主人公は、2 つの家がせめぎあう存在だ。この二項対立の構成は、19 世紀イギリス文学の特徴と言える。ガンダルフが最後にビルボに伝えた言葉は、彼の心からの誉め言葉だったと思う。

●冒険を通して、平凡で引込み思案、どちらかと言えば臆病なビルボが、勇気ある者になっていく。ファンタジーにありがちな魔法でチョチョイと解決するのではなく、自分の力で立ち向かっていくところに、このお話の面白さがある。ビルボが自分の家に帰って日常を取り戻し、それからの日々を過ごせたことにホッと、嬉しく思った。正統派ファンタジーは本離れの今時の子どもは読まないだろうか? 『ホビットの冒険』を読んで大きくなったら、『指輪物語』も読んでくれると嬉しい。

次回 10 月 15 日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

☐『異聞今昔物語 話を集める少年と消えた少女』

森谷 明子/作, 佐竹 美保/絵 偕成社 ※申込み・参加費は不要です。